

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	伊達正起
2. 審査委員	主査：(岡山大学教授) 高塚成信 副主査：(上越教育大学教授) 平野絹枝 委員：(兵庫教育大学教授) 大嶋浩 委員：(兵庫教育大学准教授) 吉田達弘 委員：(岡山大学教授) 福永信哲
3. 論文題目 An Empirical Study on the Effectiveness of Task Repetition and Noticing of Forms on Facilitating Proceduralization of Linguistic Knowledge in Oral Task Performance (口頭でのタスクパフォーマンスにおけるタスクの繰り返しと言語形式の気づきが言語知識の手続き化の促進に及ぼす有効性に関する実証的研究)	
4. 審査結果の要旨 教科教育実践学専攻言語系教育連合講座 伊達正起 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 日時:平成26年2月22日(土) 15時15分～15時45分 場所:岡山大学教育学部本館言語教育系演習室 1. 学位論文の構成と概要 (構成) 第1章：序論 第2章：手続き化について 第3章：タスクについて 第4章：気づきとメタ言語知識について 第5章：タスクプランニングについて 第6章：研究 第7章：結果 第8章：ディスカッション 第9章：結論 (概要) スキル習得理論によれば、タスクを使いながら言語を使用する練習を行うことが言語習得にとって大切である。英語授業では、発話を伴うタスクが使用され、学習者は特にタスクを繰り返す機会を頻繁に与えられる。しかし、タスクを繰り返す際、学習者は形式より専ら意味に焦点をあてる傾向が見られ、タスク繰り返しを通じて学習者の流暢さと正確さが向上するのか疑問がある。そこで、タスクを繰り返す練習を行うことが学習者の第二言語に関する言語知識に変化をもたらし、言語習得に有効に働くのか検証することを本研究の目的とする。	

第2章では、ACT-R理論を引用しながら明示的知識と宣言的知識が言語知識の手続き化に影響を及ぼすことを指摘し、第3章では、手続き的知識を発達させるための言語活動であるタスクを遂行するだけでは言語学習が促進しない可能性を指摘しながら、タスクを使った形式指導の重要性を述べた。第4章では、アウトプットタスクを遂行することで、学習者が所有するメタ言語知識を意識しながら繰り返し使用し、その結果、手続き化が促進される可能性を述べた。

第5章においては、タスク遂行時に学習者によるメタ言語知識の使用を可能にさせる方法がタスクプランニング、特にタスク繰り返しであることを指摘し、言語知識の手続き化に対するタスク繰り返しの影響に関して先行研究が明らかにしていない点を述べた。

第6章では、タスク繰り返しとエラー形式への気づきの組合せが手続き化の促進にどのような影響を与え、学習者の流暢さと正確さを向上させるのかというリサーチ上の問いに基づいて設定した仮説について述べるとともに、仮説を検証するための実験方法（参加者・実験手順・各グループへの指導内容・データの採取法）とデータの分析方法について述べた。

第7章では、統制群における被験者内分析の結果とプリテスト時の被験者間分析の結果を述べ、その後、流暢さと正確さの点からグループ内及びグループ間における差について報告した。そして、実験群のみに焦点をあてた分析結果をもとに、新しいタスクの遂行時にはタスク繰り返しと気づきの両方を伴う練習により正確さが向上し、一方、同じタスクの遂行時には気づきがある練習により正確さが向上するが、タスクを繰り返す練習により正確さが向上し手続き化の度合いも高まることを報告した。

第8章においては、結果をもとに仮説を検証し、タスク繰り返しと気づきの有効性、タスク繰り返しと気づきの組合せの有効性、そして練習時における教育的介入の有効性について考察した。そして、練習時における繰り返しが手続き化を促進すること、練習時における明示的な形式指導による気づきが手続き化を促進すること、練習時に繰り返しと気づきの両方を与えることがどちらかのみを与えるよりも手続き化を促進することを示唆した。

第9章において、本研究結果のまとめとともに本研究より得られた示唆を示したうえで、研究の限界と問題点、さらに今後の研究への課題を言及し結論とした。

2. 審査経過

本論文は、スピーキングにおける言語活動（タスク）の繰り返しと言語形式の気づきが、言語知識の手続き化を促進させるのかを検証することを目的としたものである。コミュニケーション能力を重視する英語教育の中で、指導者も学習者も、言語形式よりも意味に焦点を当てる傾向があるが、言語習得のためには、意味の伝達を主たる目的としたスピーキングのタスクを繰り返すだけでなく、言語形式への気づきを促すことが必要であることを実証的に明らかにしたことに、本論文の意義がある。

本論文の独創性は、(1)タスク遂行が言語知識の手続き化に貢献しない可能性があることを理論的に整理した上で、タスクの繰り返しと、その中で自分が使った誤った言語形式への気づきを促す指導を組み合わせたことの重要性を指摘したこと、および(2)そのことを、タスクの繰り返しとタスクにおける誤った言語形式に対する気づきの要因を操作した5つのグループを用いた調査研究によって検証したことであり、審査委員に高く評価された。

審査委員会では、論文の内容と独創性に関して高い評価を受ける一方で、データの統計処理に一部不適切なところがあること、および論文を通して学習者の実際のタスクパフォーマンスが見えにくいことが指摘されたが、これらは、今後の研究の発展に資する助言として認識された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、伊達正起の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。